Ⅳ-133　橋の美観、景観のあり方に関する一見解

東京大学　学生員　田中洋一

1．はじめに　土木構造物の美観、景観に注意を払う必要は、実際のところいったい本当にあるのであろうか。この問いに対する回答は長らく”ＮＯ”であったのであるが、ここ数年来特に橋梁に於て、景観ブームがかなりの盛り上がりを見せているようである。しかし筆者はそれらの美観、景観の扱われ方にいささかの疑問を感ずる。既存の手段、テクニックに直ちに採択するべき道を求め、その根底にある理論、意義を意識的に無視しているかのような印象を受けるのである。ところが、この抽象的な、他の分野からの借り物でない土木構造物（本論に於ては橋梁）自体に関する美しさへの考察、議論なくしては、せっかくの美観、景観を扱っていこうという文化的な試みが、色あせたものになってしまうのではなかろうか。人を感動させるにはその手段や方法を考える前の段階に、そこに力強さや命を与えるという重要なテーマがあるはずである。そこでその様な概念を追求し、さらにより具体的なものへと移行させていくプロセスの可能性を筆者の一意見としてたどってみることを試みたい。

2．橋の機能　土木構造物にある”美”、あるいはそれが与え得る”感動”はいかなるものであろうか。橋に限らず土木構造物はそもそも、「人間のより安全で快適な社会生活にとって極めて必要とされるものである」という特徴を持つ。そしてそこに、それの持つ美しさの本質があるのではなかろうか。これは”美”よりも、感動、安心感といったものに近いかもしれない。極言すると、人は、社会やひいては自分自身に益をもたらすべく存在する強大な目的と能力をもつ構造物を目の当たりにして、感動できないはずはないのである。橋については、「平面で結ばれていない地点間を空間的に結ぶ」というその機能に、人を感動させ美しいと感じさせる力が潜在的、本質的に備わっているはずなのだ。すなわち、橋に美しさを与えるのではなくそれを引き出してやること、橋は美しくあるはずでありそれは橋の機能の一つであることを認識するのが、その美観、景観を考える上での第一ステップであり、最も重要なことではなかろうか。ところが現在我々のいる、極端に合理性のみを追求してきた、かつ物資の有り余っている環境、時代の中で、土木構造物が人間の心に訴えかける力は相対的にも絶対的にも弱まり、それらの機能にもはや”美”の存在を感じとることは困難になってきている。二十世紀、人間はこれこそ理想として自ら造り上げてきた人工機能空間に逆に縛られ、近年その反動が吹出してきたのだ。ところが、人のための構造物が人に不快感を与えるということは、その機能上の欠陥に他ならないのである。

以上のように、橋という土木構造物にある”美”とその衰退を分析するのであるが、これからいかに橋を美しいものに復活させ、その寿命からして文化遺産と呼べるものに仕上げていくかが問題になってくるであろう。このあたりから問題はやや具体化されるが、大まかに二つの方針を提案したい。一つは、橋本来が美的機能を持つ存在である（あった）以上、その美しさを直接強調する方法である。つまり、橋らしい橋を前面に押し出して演出を加えるのである。例えば長大橋では、その存在自体で十分橋としての印象、潜在力があるのでさほど手を加える必要はなく、中小橋に於ては、後で触れるが様々なテクニックを用いていかねばならないであろう。もう一つは、現在知覚が困難になりつつある、橋本来の美しさと実際の印象の間に何か触媒となるものを置き、最終的にそれらの同一化を図るものである。前者を直接演出、後者を間接演出とし、実例を挙げて各々の長所、短所、あるいはいかなる場合有効であるかを考えてみたい。

3．空間の演出　具体的事例の分析に移る前に、空間の演出作業に関する項目、空間を構成する要素は、橋の場合いかなるものが考慮されるべきかについて知識を得る必要があろう。筆者は次の三つを考えた。

①スケール　②時間　③形態と環境

スケールとは言葉通りの意であり、一般長大橋ほど美しく、つまり大きな操作は必要なく、中小橋ほどその演出が重要になるのである。時間に関しては、時を経たものは橋に限らず、何か不思議な魅力が備わって

くるということであり、これら二つは理由は異なるにしてもコントローラブルではない。ここで我々が扱うことが出来るのは、橋空間の形態とそれが作り出す環境であり、逆にそのコントロール可能な要因全てを形態と環境と表現したのだ。これまでややもすると独立した問題として処理されてきた橋の造形、材質、色彩、各部の仕上げなどは、何か一つの目的を達成するために連動して効果を発揮すべきであり、根本線からの演出の考慮により、これは可能になってくるのである。そしてかかる目的意識を持った演出が、長い目でみて良いものを造り、ひいては文化となるのではなかろうか。

4．実例の分析と評価　筆者の方針に基づいて、近年美観、景観的に成功をおさめていると筆者が感ずる二つの橋を取り上げてみたい。

①かもめ橋（写真１）　これは東京都が発注し、埋立地である八潮と勝島を区切る京浜運河に渡された人道橋である。本橋の特徴はなんといってもその塔の形状にあるが、それが最も効果を現わすのは橋の外観からではなく、渡る人にもたらされる内観にあるといえよう。この塔は、橋を渡るに従い頭上高くそびえ、さらに通過に伴い人に、ゲートをくぐり異地域に入った新鮮さを与える。かもめ橋は、中小橋で色あせがちな橋としての直接機能を演出した成功例であろう。この様な直接演出の長所は、それが理解し易いものであるので速やかな効果の発現が期待できることが挙げられ、また短所は、空間の構成のよって影響を受け易く印象が損なわれ易いことがいえる。実際本橋でも、周囲の雑多な建築物によりかなり損なわれていることが明かであろう。

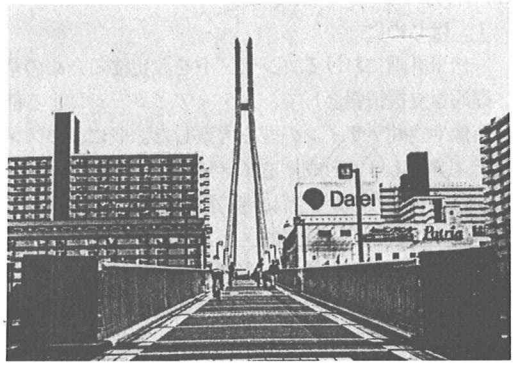

写真１

②桜橋（写真２）　これも東京の浅草にある人道橋であるが、前のかもめ橋の直接的な演出に対して日本の”奥”の概念*を、極めて斬新な機能を橋に与えることにより備えさせることに成功した例であろう。そこに至る四つの通路により橋の中央に、広場という存在としてのワイドさ独立性を与え、細かい面に至っては、頭上にかぶさらない街灯による上方への解放感、ガラス張りの欄干による下方への親水感、といったようにそこに憩いの場を設け、人をとどめるべく機能付けがされている。そして、人が長く留まる空間とは”奥”のある空間に他ならないのである。日本という地域性を日本人の好む空間の捉え方まで発展させた、間接演出の代表例であろう。長所として、共用者の心を反映した親しみやすいものが出来、周りに影響されにくいことが挙げられる反面、効果の予想がし難く、失敗のリスクが大きい短所もあるといえよう。

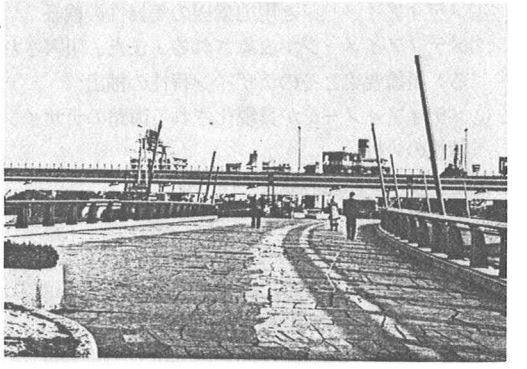

写真２

5．おわりに　本論に於て筆者は、各土木技術者個人に、これから求められてくるであろうより柔らかい、ヒューマンな工学の発想の自覚を訴えたかった。これからの時代はその方向にあると確信している。そしてそこで置き去りにされないためにも、土木構造物の美観、景観は今後本気で取り組むべきテーマの一つだと主張したい。最後に、本論の作成に適切な助言を与えて下さった、本学土木工学科の伊藤　學教授、藤野陽三助教授の御両名に深く感謝の意を表します。

注）* 見えかくれする都市　槇　文彦他著　鹿島出版会

引用文献）「橋の美観、景観のあり方に関する考察」　田中洋一
昭和６３年度東京大学工学部土木工学科橋梁研究室卒業論文